

複式簿記の基底にある構造的性

— <意味場>の視点から —

大西新吾

(2013年1月25日受理)

I はじめに

笠井昭次教授の研究の中心テーマは、複式簿記の基底にある勘定分類に依拠しつつ、現行財務会計実践の全体を合理的に説明する説明理論の構築にある(笠井2000,1-35)。ここでの「勘定分類」は「会計構造」と同義である。青柳文司教授は「会計構造の公理化」とおして、「資産・負債・資本・収益・費用」という勘定の分類が弁別特性とよばれる言語学の基本概念に依拠して3回の分割(成分分析)により規定できる、とされる(青柳1991,117-135)。両教授には共通した見方(前提)がある。それは両者とも会計をひとつの「言語」とみている点である。また会計という言語の基礎に複式簿記の存在を認め、その基底に「勘定」を中心に成立するある種の<構造的性>を認めている点である⁽¹⁾。

本稿においても、両教授と同様に、会計をひとつの言語体系とみる立場にたつ。そのさい、会計という言語体系を「手話」と同様に自然言語に寄り添って成立するものとみる。そうした前提のもとで、複式簿記の基底にある<構造的性>に迫りたい。より具体的には、会計言語の中で使用される会計用語のうち、とくに「勘定科目」という語に注目し、その連関を<意味場>という視点から考察していくことにする。考察にあたっては、日常でてくるより典型的な例をもちいることとする。なお、「勘定科目」に注目するということは、「勘定金額」はいったん捨象して考察するということであり、評価・測定といった計算構造的側面を考察に持ち込まないということである⁽²⁾。

II <意味場>の視点と分析方法

1 <意味場>とは

うえで<意味場>の視点から複式簿記の基底にある<構造的性>に迫ると述べた。ここで<意味場>とは、意味を成立させている<場>のことであり、「互いに緊密な関係にある語の集まり(まとまり)」にとらえておく⁽³⁾。<場>のイメージとしては、<組み体操の型>や<くもの巣>が想起される。語どうしが対立しながら引張り合っているイメージである。この<場>の考え方に立てば、語の意味は<場>において規定されることになる。すなわち、個々の語の意味はその語が指す対象との関連で決まるのではなく、その語と同じ言語内の他の語との間の相互規定の関係で決まることになる。そのような相互規定を可能にしているのが<場>である(池上1993,272)。

<意味場>の視点から考察をするということは、「勘定科目」という語どうしの関係(まとまり)に注目して<構造的性>を探求することを意味する。

2 意味分析の方法(二つのアプローチ)

言語学では、語彙意味論の領域で語の意味構造が研究されている。その研究方法には大きく分けて二つのアプローチがある。そのひとつは、成分分析(語彙分解)といわれるものである。そこでは、ある語をそれより原始的な要素(意味成分、意味素性あるいは意義特徴)によって分析していく。つまり、語の意味の分析(分解)をおしすすめることで、意味のごく一般的な要素(元素)(semantic primitive)に近づこうとするものである。言語学

上、語彙の〈意味場〉の例として、人称代名詞や親族用語の意味構造があげられるが、さきの青柳教授の弁別特性に注目した構造分析は会計言語におけるこのアプローチの援用例といえる⁽⁴⁾。

もうひとつのアプローチは、同じ〈意味場〉に属すると思われる二つ以上の語の関係を解明しようとするものである。その関係としては、類義関係、反義関係、包摂関係などがあげられる。このアプローチではある関係はそれよりも大きな関係の中での一つの相とみられ、意味的なまとまりに注目して語と語の関係を広げてみていく（ある関係を成立させているもっと大きな関係（場）を探索する）ことで、意味構造を探ることになる。前者のアプローチが意味の元素を追求するというところで量子論的なミクロ的アプローチだとすれば、後者のアプローチは宇宙論的なマクロ的アプローチといえるが、両者の接近方法は同じものを求めるための出発点の違いといえる。両者とも言語現象（意味現象）を説明するために、語彙の意味構造＝〈意味場〉を探索する。

3 本稿のアプローチ

筆者はこれまで前者のアプローチを意識した考察（プリミティブ・アプローチ）をすすめてきた。「勘定科目」・「勘定金額」・「罫線」の基本的三要素から成る「勘定」を会計言語における言語的実体とみたうえで、とくに「勘定科目」に注目し、その意味構造の解明を試みてきた⁽⁵⁾。具体的には、個々の仕訳文のなかでの「勘定科目」間の関係を〈依存関係〉に注目して考察した。そこでは、ある「勘定科目」が仕訳文のなかでどの科目とは結合しどの科目とは結合しないか（〈相互依存〉と〈相互無依存〉）、また結合するにしても借方と貸方を入れ替えると結合しなくなるかどうか（〈一方依存〉）を整理していった。整理するにあたっては、数学のグラフ理論やコンピュータ・ケミストリーのコネクション・テーブルを援用した。結合することを「勘定科目」と「勘定科目」が手を結ぶととらえ、その結合手を〈触手〉とよんで、意味を作り上げている素＝〈触手〉を求めるというアプローチで、意味分析を試みてきたわけである⁽⁶⁾。

本稿はもうひとつのアプローチを試みる。すな

わち、考察の視点をプリミティブの探求という方向から逆に転じて、「勘定科目」の結合関係をより広く大きな〈場〉に注目することでみていく。ある仕訳文が成立するのは、実はそれに関連した別の仕訳文があるからであるとした場合、語と語の関係から文と文の関係、節と節の関係へとその関係をひろげてみていったときに、その意味のまとまりの全体＝〈意味場〉とは何かを探索する。それは認知言語学において「プロトタイプ（典型例）」から「スキーマ（思考の型）」を究明することに相当する。この考察が複式簿記の基底にある構造的探求へとつながる。

III 仕訳文どうしの〈関係〉

1 複式簿記の基礎と金融機関の記録モデル

「勘定科目」と「勘定科目」の関係、仕訳文と仕訳文の関係へと拡張するなかで、山榊忠恕博士の次の論述が考察の手がかりとなる（山榊1983.4）。

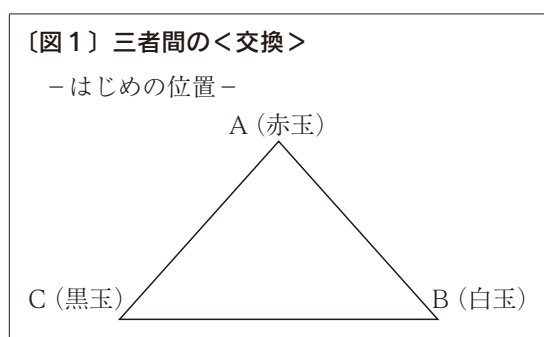
「……債権・債務のような対人間の関係ともなると、もはや記録なしには、その管理が困難である。したがって、合理的・秩序的な記録・計算の必要を最初に痛感するに至ったのも、もともと第三者とのあいだの貸借こそを主な業務内容とする性質の企業、すなわち金融機関にはほかならなかった。簿記というのは、もともと、そのような事情から、預金者や貸付先とのあいだに存在する貸借関係を人名的に明らかにするための記録計算方法として、金融業界においてあみ出されたものであるが、その後の信用経済の発展によって、商企業相互間の経済活動にあっても、商品の売買と代金の決済とのあいだに時間的な間隔が生じはじめたところから、それらの売買上の貸借関係の記録計算方法としてもまた珍重されるに至った。」

この論述は、金融機関の業務記録モデルが複式簿記の基礎となっていることを述べている。つまり、複式簿記の記録が成立する最小単位とし

て、預金者・金融機関・貸付先の三者が必要であることを述べている。そこでこの金融機関の記録モデルを典型例とみて、そこでの仕訳文どうしの関係をみていくことにする。そのさい数学の「群 (group)」を援用して記録の数学的構造という視点からもみていくことにする。

2 記録の<構造的性>と群

いま〔図1〕のように、正三角形の各頂点の位置にA (金融機関)、B (預金者)、C (貸付先)をおく。はじめにAは赤玉を、Bは白玉を、Cは黒玉をもっているものとする。ここで三者間で行われる取引を玉の<交換>に注目して試みる。すなわち、借り入れからはじまって、貸し付け、回収、そして返済にいたる金融機関の業務は、以下の①から④の連続する<交換>とみることができる。ここで会計を<交換>表現システムとみると、<交換>は<対称性 (symmetry)>の現われのひとつであることから、対称性を計る数学的道具としての群による考察が有効となる。群による考察によって<構造>がみえてくる。



それぞれの玉の交換を、A (金融機関) の立場で記帳する典型的な仕訳例として示すと次のようになる。

・典型的仕訳例 (Aの立場で記帳)

- ①A-B間の交換
：「白玉 (現金)」-「赤玉 (借入金)」
(AはBから白玉を受け取るかわりに、Bへ赤玉を渡した。)
- ②A-C間の交換
：「黒玉 (貸付金)」-「白玉 (現金)」
(Aは (Bから受け取った) 白玉を渡すかわりに、Cから黒玉を受け取った。)

- ③A-C間の交換
：「白玉 (現金)」-「黒玉 (貸付金)」
(AはCから (もともとはBの) 白玉を受け取るかわりに、Cへ黒玉を渡した。)
- ④A-B間の交換
：「赤玉 (借入金)」-「白玉 (現金)」
(Aは白玉をBへ渡すかわりに、(もともとは自分の) 赤玉を受け取った。)

以上①から④の4回の操作(運動)(4つの仕訳)の結果、各玉はそれぞれ元の所有者に戻ることになる。(なお、為替手形を振り出した場合は、③と④の代わりに、Aの立場で「借入金」-「貸付金」と記録され、仕訳文は3つで完結する。(これは群の視点からは三者間の3つの玉の回転(120度)に相当する。)では次に、このモデルを商品売買業に準用して試みると、以下のようになる。

・商品売買業に準用

- ①'A-B間の交換
：「白玉 (商品)」-「赤玉 (買掛金)」
- ②'A-C間の交換
：「黒玉 (売掛金)」-「白玉 (商品)」
- ③'A-C間の交換
：「白玉 (現金)」-「黒玉 (売掛金)」
- ④'A-B間の交換
：「赤玉 (買掛金)」-「白玉 (現金)」

ここでも4つの仕訳でひとつの意味的なまとまりを形成している。なお、ここで②'から③'で、白玉が(商品)から(現金)に変わっているが、その<関係>(A-C間の交換であること)は変わっていないことに留意したい。

3 小括

以上のように、金融機関の典型的な業務記録モデルを、玉の<交換>の記録の面から仕訳文とともにみた。金融機関のモデルはその取引記録において、4回の<交換>記録(4つの仕訳文)で完結している(閉じている)。正三角形の対称性群には3つの互換と2つの回転と1つの恒等置換の合わせて6つの操作がある⁽⁷⁾。紙幅の関係でここ

では詳述できないが⁸⁾、結論的にいうと、複式簿記という記録システムが金融機関の記録モデルを基礎としているとすると、数学的構造という視点からは複式簿記は正三角形の対称性群と同型とみることができる。同型であるということは、〈交換〉(対称性)の組み合わせ操作によってひとつのまとまりとして認識されうる〈意味場〉が成立しているということである。

なお、この例で、最初に赤・白・黒と玉の区別をしたが、これは説明の便宜上おこなっただけで、〈関係〉に注目する場合、ほんらいその区別さえいらぬ。群は関係する《モノ》ではなく〈関係〉そのものをみるために有効なものだからである。

IV 「勘定科目」間の意味空間 —〈意味場〉の可視化

うえでみたように金融機関の記録モデルを複式簿記記録の基本的型とみるならば、三者間の〈交換〉関係の記録が、会計言語現象ほんらいの認知のまとまり=〈意味場〉となる。その三者間の関係を複式簿記はいくつかの二者間の関係に切り取って表現している。換言すると、複式簿記はひとつの意味単位としての三者間の関係を二者間の〈交換〉関係で切り取り4つの仕訳(為替手形を使うと3つ)で表現する。金融機関に注目するということは、貸借関係に注目するということであり、時間差に注目するということになる。それは時間で区切ることで別取引とみることにつながる。そうした意味で、複式簿記は三者間の関係(意味のまとまり)を時間差に注目して二者間の関係に切り取って表現する「発明」といえるかもしれない。ところで、〈貸借〉関係に注目すればそこには「時間差」があるが、〈交換〉は「時間差」を無視する。そこで複式簿記の基底にある〈構造型〉を探るためにさらに「意味空間」を考えてみる必要が生じてくる。

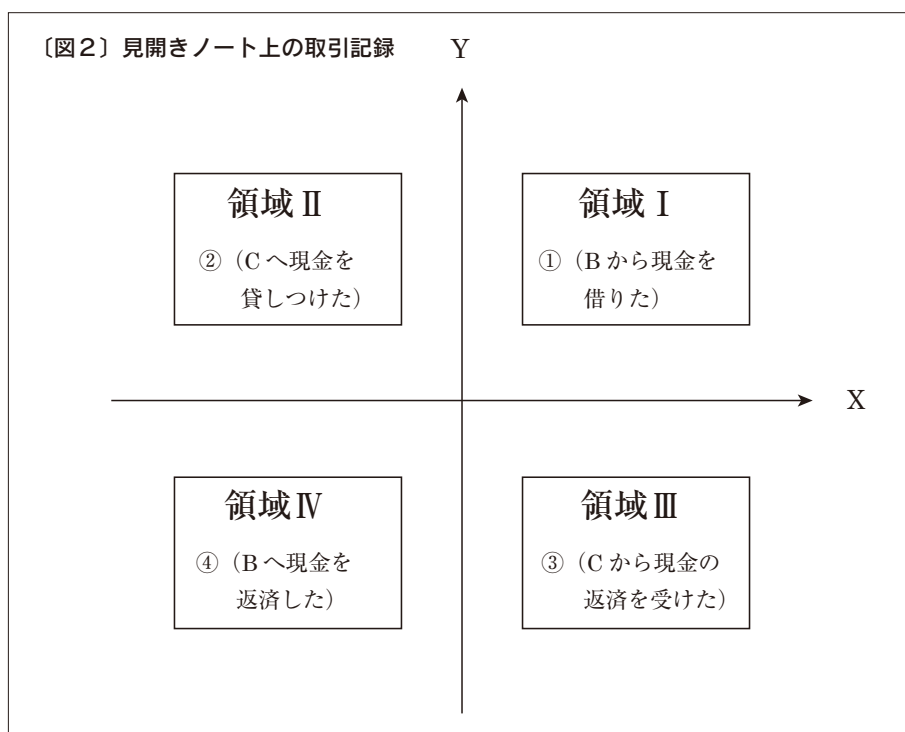
1 紙の上(平面上)の記録

意味空間を考える(〈意味場〉の可視化)にあたり、平面空間を考えてみる。記録は紙の上(平面、2次元空間)で行われるからである。いま、ノー

トの見開き(紙の上)に、さきの金融機関の4つの取引(①~④)を記録することを考える。〔図2〕はそれを示している。記録者を〔図1〕の場合と同様に、A(金融機関)とする。図のなかでY軸としたタテ線はノートを見開きにしたときの中央線のことである。図のように、そのY軸の右側に取り引①(Bからの借り入れ)を記録し(領域Ⅰ)、その左側に取り引②(Cへの貸し付け)を記録したとする(領域Ⅱ)。その後、Aは貸し付けた現金をCから回収(取引③)したさいにその記録をし(領域Ⅲ)、Bへの返済(取引④)の記録をもって(領域Ⅳ)、一連の交換が完結する⁹⁾。図中の領域Ⅲは領域Ⅱの記録の抹消の意味があり、領域Ⅳは領域Ⅰの記録の抹消の意味がある。取引の発生と抹消を区切る仕切り線としてX軸を描いてみる。ではいまからこのノート(平面)上の記録がX軸とY軸によって区切られたデカルト座標上にあるものとして考察をすすめていこう。

2 デカルト座標への布置の試み

ここでは会計記録の〈意味場〉を可視化するためにデカルト座標を用いてみる。さきの〔図2〕の4つの領域に取引記録としての仕訳文を布置してみる。それが〔図3〕である。図のなかに仕訳文を布置するにあたり、いくつか考慮した点がある。まずX軸を「現金」の運動記録をととらえ、その正の方向を「現金」が来る(come)とみ、負の方向を「現金」が行く(go)とみた。Y軸は「時間差」に注目し、その正の方向を〈あとで〉、負の方向を〈あとで〉の解除(削除)記録とみた。(あるいはY軸をX軸の「現金」との〈交換〉により「得たもの(こと)」あるいは「失ったもの(こと)」の発生記録をととらえ、負の方向をその解除記録とみることもできる。)そのうえで仕訳文を座標上の点として布置した。領域Ⅰ(①)の「現金」-「借入金」という結合関係は、XY面上の点aに対応する。同様に、②「貸付金」-「現金」はXY面上の点bに、③「現金」-「貸付金」はXY面上の点cに、④「借入金」-「現金」はXY面上の点dにそれぞれ対応している。なお、本稿では計算構造的側面は捨象するとしたが、便宜上(見やすさ)から座標上の各点に数字(ここでは「3」、「-3」)



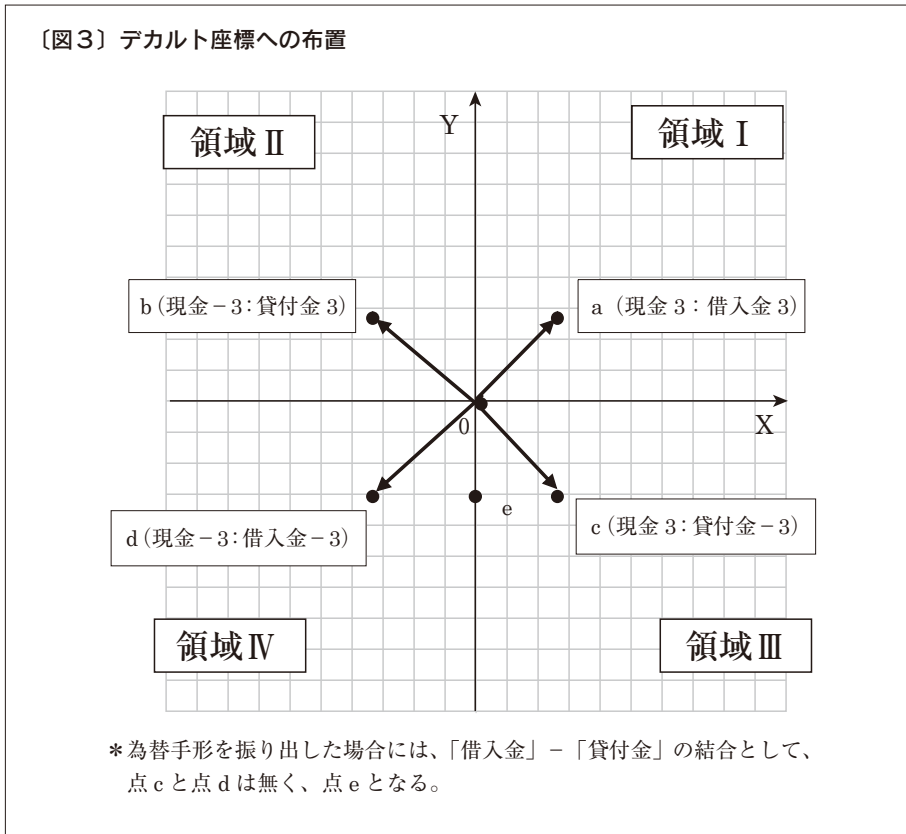
を入れた。

ここで座標上の各点と原点0を結んだ線分（ベクトル）に注目すると、〔図3〕のように原点0を中心に各点が引っ張り合い、全体として釣り合っている。換言すると、この図はa,b,c,dの4つの点、すなわち4つの仕訳文が平面上でひとつの<意味場>を構成している様子を描いている。留意したいことは、「仕訳文①」+「仕訳文②」+……=「全体」ではなくて、「全体」があってはじめて「部分」が意味をもつという点である。図中のベクトルのどれかひとつでもとってしまうと釣り合い（バランス）は崩れてしまう。すなわち<意味場>は消滅する（あるいは別の<意味場>となる）。

こうして「勘定科目」間のつながり関係を、仕訳文の中での関係から仕訳文どうしの関係へとひろげてみると、そこには金融機関の業務記録モデルを典型的な例としたひとつの<意味場>を見出すことができる。

3 計算構造への接近

ここまで金融機関の業務記録モデルを典型例として考察を進めてきた。そこでは評価・測定という金額面を捨象した。すなわち「損益」関連の「勘定科目」はでてこなかった。（これらは「勘定金額」を前提とした「メタ勘定科目」とみることができる。）ここで、ここまでの<意味場>の考察から計算構造的側面への接近について、今後の展開の可能性として少し述べておく。さきの〔図3〕で4つのベクトルが原点0を中心に引っ張り合って均衡していたが、その引っ張り合い（バランス）が崩れ、均衡点（<意味場>として釣り合った点）が原点0からズレるとき、「損益」が生じるとみることができる。〔図4〕において、点cから点c'へのズレ（差額）が「受取利息」($\overline{cc'}$)となる。同様に、点dから点d'へのズレ（差額）が「支払利息」($\overline{dd'}$)となる。両者とも「方向性をもった線分」（ベクトル）として認識される。この平面デカルト座標でみるかぎり、いわゆる<収益>は「領域III」で表現される。一方、<費用>は「領域IV」で実現している。（ただし、評価損益は「領



域Ⅰ」、「領域Ⅱ」で認識されることになる。)

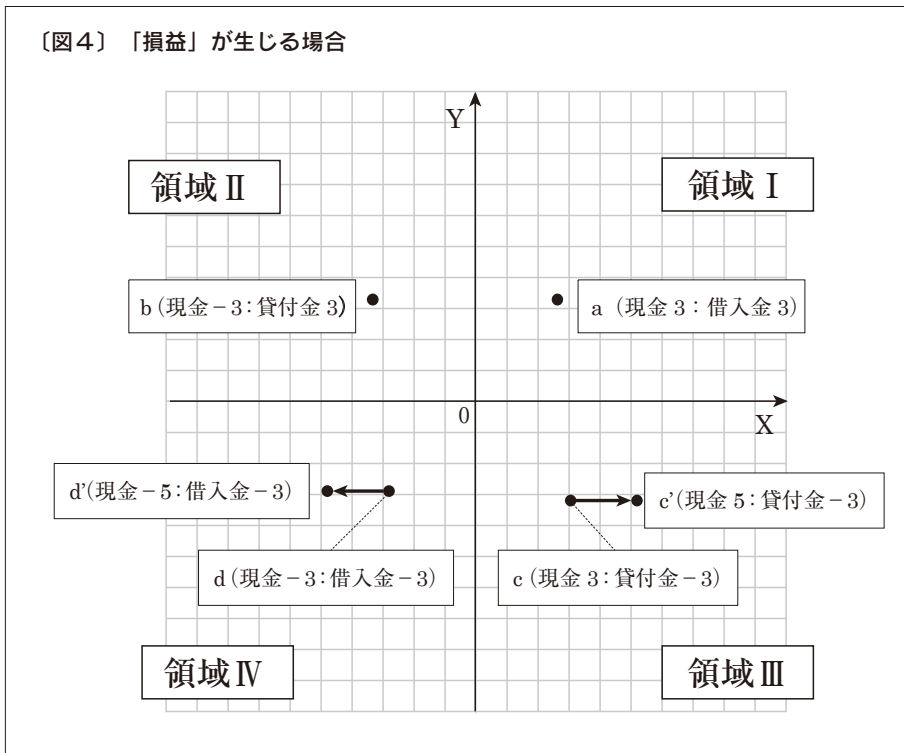
4 5つの勘定分類と折り紙的思考

〔図3〕、〔図4〕のようにみても、このデカルト座標の領域Ⅰは5つの「勘定」分類の「負債・資本」に、領域Ⅱは「資産」に、領域Ⅲは「収益」に、そして領域Ⅳは「費用」に相当するようにもみえる。その真偽はここでは不問にするとして、仮にたとえば領域Ⅰを「負債」とみた場合、それは一つひとつの「勘定科目」という語（要素）の集合としてのものではなく、ある「勘定科目」とある「勘定科目」の結合した領域（ひとつのちいさな「場」）としての「負債」とみることが肝要である。つまり、「資産・負債・資本・収益・費用」の5つに「勘定」が分類される以前に、これらはトポロジ的にいってひとつの「場」であったということである。そしてその「場」の一展開として5つに分類した見方も可能だということである。すな

わち、個々の要素（「勘定科目」）の集合として「勘定」分類をみるのではなく、ある「意味場」があってその構成要素として仕訳文があり、さらにその仕訳文の要素として「勘定科目」があるとみることである。換言すると、点から線、線から面、面から立体という流れではなく、「意味場」の視点でみるということは、たとえて言うなら折り紙（平面）を一回折って折り目（線）ができ、もう一回折ると折り目と折り目の交差（点）ができるようにみるということである。

V おわりに

以上、複式簿記の基底にある「構造性」について、言語学上の「意味場」の視点からの考察を試みた。金融機関の典型的な取引記録例（プロトタイプ）から、4つ（ないし3つ）の仕訳記録を1セットとする三者間の意味的まとまり = 「意味



場> (スキーマ) を抽出し、可視化のためにそれをデカルト座標 (平面) 上に描出してみた。そのさい数学の群の力も借りた。考察からいえることは二つある。ひとつは、言語学上の視点 (意味論) からみた場合 (また数学的構造の視点からみた場合)、複式簿記の基底には三者間の<交換>関係を最小単位とする<意味場> (意味構造の基本) があるということである。もうひとつは、その<意味場>は「勘定科目」間の<因果>ではなく<相関>により成立しているということである。

以下、簡単に考察を振り返る。複式簿記という概念形成装置は、取引を記録するにあたって、三者間の<交換>関係を「時間差」に注目して<貸借>関係 (二者間の関係) に切り取って表現するシステムといえる。その基底には「勘定科目」という語の集まりで形成される<意味場>があり、そこでは構造を形成させる力が働いている。その力は、(水面上に浮かんだ数枚の円玉がやがて秩序だった集まりを形成するように) デカルト座標上に「勘定科目」(語) を布置したさいに形成

される引っ張り合いのパターン (型) として現れる (<場>が張り合っている)。例としてみた金融機関の記録モデルを「勘定科目」のつながりの点からみると、4つ (ないし3つ) の仕訳文をひとつのまとまりとするということは、1つの仕訳文は2つの「勘定科目」の結合により成立しているとして、4つ (3つ) の仕訳文× 2科目 = 8つ (6つ) の語のつながりを意味構造としてみていることになる⁴⁰⁾。

また、先述したとおり、「勘定科目」(語) 間の意味関係 = <意味場>をデカルト座標上で考えてみると、「資産・負債・資本・収益・費用」という5つの「勘定」ないし概念は、個々の「勘定科目」を要素とした集合 (点のあつまり) ではなく (つまり語の類型化の結果としての5つの「勘定」ではなく)、語どうしの<関係>としての<意味場>の一部 (一領域) とみることができる。その<関係>は二者間の<因果>ではなく三者間の<相関>を基礎として成り立っている。ある現象を最初から二者間の関係でとらえるのと、三者間

の関係を認めたいうえで二者間に分節してとらえるのではその意味するところは全く異なる⁽¹⁾。

最後に課題をあげる。三者間の関係を二者間の関係に切り取って表現するシステムが複式簿記だと述べた。その切り取る理由として、〈貸借〉関係および「時間差」をあげたが、3次元を2次元で表現する、すなわち紙の上（平面）に記録する制限からきているのか、それとも人間は三者以上の関係を一度に表現（言語化）できないことからくるのか、などほかの理由も考えられる。このことは再考したい。また、デカルト座標上で取引記録を考えたが、そもそもデカルト座標じたい、すでに何かを捨象しているものであり、いったんデカルト座標上に置かれてしまうと、そこを出発点として考察がリアに展開していってしまう（評価・測定問題へと進んでいく）。本稿はデカルト座標を出発点として展開する直前、すなわち現象→記録→計算のプロセスのうち、現象→記録の原初的な面に注目して考察してきた。ではいったんデカルト座標という平面上（2次元）に記録されたものから、元の現象・かたち（3次元）に再現することができるであろうか。つまり3次元を2次元として描いた絵をみて、2次元から3次元へと元のかたちに戻すこと（一点透視図法により描かれた絵をもとに元々の情景を再現すること）は可能であろうか⁽²⁾。この問題、すなわち分節化（仕訳化）以前に戻って記録を考えること、そのために3次元意味空間といったよりトポロジカルな視点で「勘定科目」間の関係を考えることは今後の課題である。

<註>

- (1) 青柳教授にあっては、複式簿記は会計言語（仕訳記録という「文」の集合）の文法ととらえられる（青柳1991、117-119）。
- (2) 筆者は人間の認識（認知）と言語の関係に関心がある。そうした意味で、本稿の考察は認知言語学的な考察あるいは言語の意味論からの考察ともいえる。
- (3) 本稿は、池上（1993、255-320）（第6章 語彙における意味構造）および国廣（1996、143-181）（第4章 語彙の構造）を参考に〈意味場〉をとらえている。
- (4) ただし、青柳教授は個々の要素（語）ではなく、類型化された集合としての5つの「勘定」概念の意味成分を導出したのであって、類型化される前の「勘定科目」(語)の

まとまりから意味成分を導出したのではないことに留意したい。ここにはチョムスキーの生成文法の考え方があ

- る。
- (5) 会計言語が自然言語に寄り添って成立しているとすれば、会計現象の認知は自然言語を介して行われているはずである。そこでは会計用語のひとつとしての「勘定科目」という語が会計言語化に関与しているとみることが可能である。自然言語と会計言語の関係面に注目することで、言語を介した人間の認知過程をとくに「意味」の面から解明することに貢献することが期待される。こうした理由から「勘定科目」に注目した考察をおこなった。
- (6) こうした考察から、①すべての勘定科目は「現金」を中心に相対的にあること、②「現金」以外の科目は、時間を基準とした「現金」との〈距離〉・〈方向性〉・〈間隔〉によって位置づけることが可能であるということ、③その位置づけは「勘定科目の周期表」を提出することにつながるという試案を出した。そこではグリッドの欠けたものとしての「語彙の穴」がみつかることになる。大西（2004）（2005）（2007）を参照されたい。
- (7) [図1] でいうと、A-B間、A-C間、B-C間の3つ互換、A-B-Cの三者間の2つの回転（120度と240度）およびAもBもCも動かない恒等置換1つの合計6つである。
- (8) 「会計と対称性」について論じた大西(2009a)を参照されたい。なお、1854年にアーサー・ケリーによって導入された「ケリー表」を用いれば〈交換〉の組み合わせを表すことができる。
- (9) 高寺(1967,69-82)で、どのような経路をたどって勘定簿記の原型が形成されたかについての説明がある。記録の記載位置（領域Ⅰ～Ⅳ）について本稿はこれを参照した。
- (10) この8つないし6つの要素によって成立する〈場〉の展開（論理）を、8 place logic あるいは 6place logicと呼ぶことができる。
- (11) これに関連して、田中茂次教授は会計言語は日常言語の翻訳の結果であるとしたうえで、チョムスキーの変形生成文法に依拠して会計言語の深層構造を説明する(田中1995、44-69)。そこでは二者間の逆関係に注目して、会計言語を構成する取引を二つの一元的取引（犠牲関連取引と便益関連取引）ととらえることを考察の出発点として会計言語の構造を究明されている。また、冒頭でも述べたが、笠井昭次教授は複式簿記の基底には勘定分類があるとし、それは企業資本等式として定式化されている。その企業資本等式は資本循環シェーマの企業会計的変容によって導出される。そこでは企業の活動が資本貸与活動（時間）と価値増殖活動（空間）に区別される。
- (12) おそらく再現される元のかたちはただひとつには決まらず数種類のものが考えられることになるだろう。つねに解釈の余地は残る。われわれ人間はある絵を見て、経験から元のかたちを「ありそうな(probable)」かたちとして想像することはできても、「ありえる(possible)」かたちとしてただひとつの解釈に決めることはできない。「ありえる」かたちとして答えが複数あることはむ

しろ当然のことだからである。その一方で、「ありそう
な」かたちを決めるためには、別の要素を取り入れた理
論（ルール）が必要になる。こうした議論は概念フレ
ームワークの問題にも関連してくると思われる。

<謝辞>

本学の北岡一道先生から<意味場>のとりえ方に関して、
言語学および記号論的観点からのご教示に与りました。
心より感謝申し上げます。

<参考文献>

- 青柳文司（1991）『会計学の基礎』中央経済社。
池上嘉彦（1993）『意味論』大修館書店。
井尻雄士（1968）『会計測定の基礎—数学的・経済学的・
行動学的探求—』東洋経済新報社。
上野清貴（1998）『会計の論理構造』税務経理協会。
大西新吾（2004）「会計記号体系内における『勘定』の意
味関係 —イェルムスレウの<依存関係>を手
がかりとして—」『会計』第166巻第3号（2004
年9月）、60-73頁。
————（2005）『『勘定科目の周期表』試案—グラフ理論
から『勘定』間の<関係>について考える—』『會
計』第168巻第3号（2005年9月）、78-89頁。
————（2007）「会計の認識<構造>—『勘定』の記号

論的考察—」『会計』第172巻第1号（2007年7月）、
69-82頁。

- （2009a）「会計と対称性」（『笠井昭次先生古稀
記念論文集（笠井昭次先生古稀記念論作集第2
巻）』慶應義塾大学出版会（私家版）、29-47頁）
————（2009b）「笠井学説研究序説—会計的認識の基
底構造を探る」（『笠井昭次先生の人と学問（笠
井昭次先生古稀記念論作集第3巻）』慶應義塾大
学出版会（私家版）、233-262頁）
笠井昭次（1993）「会計（学）と簿記（学）との関係を巡っ
て」『三田商学研究』第36巻第5号（1993年12月）、
49-70頁。
————（2000）『会計の論理』税務経理協会。
国廣哲彌（1996）『意味論の方法』大修館書店。
高寺貞男（1967）『簿記の一般理論』ミネルヴァ書房。
田中茂次（1995）『会計言語の構造』森山書店。
永野則雄（1992）『財務会計の基礎概念』白桃書房。
原田耕一郎（2001）『群の発見』岩波書店。
山梨正明（2002）『認知言語学原理』くろしお出版。
————（2004）『ことばの認知空間』開拓社。
山榎忠恕（1983）『複式簿記原理（新訂版）』千倉書房。
————（1985）「会計学の対象と方法」『税経セミナー』
第30巻1月号（1985年1月）、2-19頁。